

開館5周年記念特別展「広重画業展」後期



第2回

# 歌川広重 「東海道五拾三次之内 日本橋 行列振出」

※本図の摺りの早いものには、題名の下に「行列振出」と副題が摺られています。  
本作品にはありませんが、本来の作品名として採用しました。

図1「東海道五拾三次之内 日本橋 行列振出」  
大判 天保6年(1835)頃 個人蔵



あっ、広重の日本橋を描いた絵！教科書にも載っているよね。でもちょっと待てよ、どこが違うぞ…？

そうです。教科書やテレビなどを通じて皆さんがご存じの「広重の日本橋」は、おそらく図2のほうでしょう。では図1は何？

歌川広重は、東海道を主題としたシリーズを生涯に20数種以上描いています。そのなかでもっとも有名なのが、天保4年(1833)頃、保永堂(竹内孫八)と仙鶴堂(鶴屋喜右衛門)の2つの版元が合同で出版した「東海道五拾三次之内」。

江戸から京までの宿場風景を描いた全55枚のシリーズです。実は両図ともこのシリーズの「日本橋」なのですが、図1は、図2の発売後、<sup>ほんぎ</sup>版本を彫り直し、かわりに売り出されたようなのです。見比べてみると全体の構図は変わっていませんが、描かれた人数が大きく違います。図1は、<sup>ほてふ</sup>棒手振りの他に植木売、貸本屋、住吉踊りなど様々な職種、階層の人々が雑多に入り交じっています。図2が旅のはじまりを主題とした、すがすがしい日本橋の朝を描くのに対し、図1は大都市江戸の繁栄ぶりを伝える名所としての日本橋を描いているのです。



図2「東海道五拾三次之内 日本橋 朝之景」当館蔵

図1が出版された理由としては、図2の版本が火事で焼失したからだと、図2の図柄が寂しすぎるので、にぎやかな日本橋(図1)が出版されたのだともいわれていますが、はっきりと分かっていません。なにやら複雑な出版事情があったことを匂わす本作品は、広重の代表作「東海道五拾三次之内」に隠された謎のひとつとなっているのです。(本作品は開館5周年記念特別展「広重画業展」後期(11月27日まで開催中)に出品されています。)

※前回の広報展示室に誤りがありました。ここにお詫び申し上げます。10行目「春には南へと」→「春には北へと」

(那珂川町馬頭広重美術館 学芸員 津田卓子)

## 二人展 開催

11月1日～30日まで、大山田下郷の御前岩物産センター内のギャラリーで、2町合併を記念する塚原さんと堀江さんの作品展が開催されます。ぜひ一度ご鑑賞ください。

阿<sup>あ</sup>呼<sup>え</sup>・堀<sup>ほ</sup>江<sup>え</sup>勝<sup>か</sup>美<sup>み</sup>さん  
(大山田上郷)



## ミニ ギャラリー



懐<sup>なつか</sup>かしの学<sup>まな</sup>び舎  
塚<sup>つか</sup>原<sup>はら</sup>一<sup>かず</sup>雄<sup>たけ</sup>さん (吉<sup>よし</sup>田<sup>た</sup>)